

たじみん屋話 137

妥協を許さない姿勢が佇まいに現れる

桔梗はオーラを観察したことがない。武道の達人やカリスマと呼ばれる料理長や会社の会長等が全身に纏っていると言われるものだ。この観察は難しい。なぜならこの人達が纏っているらしいオーラは、見える人にしか見えないからだ。

科学は、誰もが観察と再現が不可能なものには、否定的見解を持つ。しかし、まだ観察できていないだけで存在の可能性は零ではない。したがって「わからないものは引き続き調べる」という科学者の本分として、それについて考えてみよう。

オーラの発生条件は、カリスマと呼ばれる人物とその人物に尊敬や畏敬の念を持つ人物の存在が必要だ。そしてオーラ観測が可能な人は後者だ。オーラを出しているらしい本人も、その人の実績を知らない人にも見えない。このことから、オーラは、ある人間間の相対的関係性の強度レベルに応じて生じるもので、その相対的関係性の度合いを感じる観察者の強度量により、観察者自身が創出する虚像であると考えられる。

人間の脳は存在しないものを創出するのが得意だ。数本の棒の組み合わせを警官と認識したり、薄を幽霊と判断するなどだ。全ては不安定な状況に置かれた脳が、安定性を求めて創出したものだ。つまり、脳は自身でその記憶から実際に存在しない認識やモノを作り出すことができるのだ。

カリスマレベルの人のパフォーマンスは圧倒的だ。当然それを目撃した人やうわさを聞いた人は圧倒される。そしてその情景とその人に対する憧憬や畏敬の念を脳は強く記憶するだろう。この記憶を保持したまま、後日観察者が再びその人と出会うと、脳はこの相対的関係性を想起し不安定になる。そしてその強度量に安定化を図るために、オーラを脳レベルで創出するのではないだろうか。

我々は、日々事象を各自で解釈して生活している。だから、同じものを見ても他人が同じように理解しているとは限らないのだ。そもそも同じように見ているかも怪しいのだ。この解釈は読書における文章理解も同様であり、特に俳句はその傾向が強い。字面から文章の意図を理解しても作者の意図を理解したとは限らないのだ。ひょっとしたら、作者が考えもしないことを勝手に創造し認識しているかもしれないのだ。逆に言えば、読むたびに様々な考えを読者に提供できる文章は繰返し読むことが可能なため、いつまで読み継がれる文章になれる。小林一茶の俳句、源氏物語、漱石の「ぼっちゃん」しかりだ。

我々は、日々様々な事象や人間関係に喜怒哀楽を感じ、ときに悩みながら生活している。中には、追い込まれて絶望の域に達することもある。しかし、そのときこそ、今見ていると思っているものや考えているものは、自らの勝手な解釈により造り出した幻想ではないかと確認して欲しい。即ち全ては解釈次第ということを思い出し、冷静になって普遍的な認識を見出すように努めて欲しいと思う。

ちなみに桔梗は、源氏物語は登場する7割の女性が出家するだけの話だとの勝手な認識を、冷静な目で修正中だ。